Fate×東方　あたしを誰だと想ってるの！？

リョク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆａｔｅ×東方　あたしを誰だと想ってるの！？

【Ｎコード】
Ｎ３５７４Ｙ

【作者名】
リョク

【あらすじ】
「俺を転生させろ！」と、言う身勝手な存在のせいで少年は正史で召喚する黄金の剣を持つ少女を先に身勝手な存在が召喚した。
そして少年は参加することが出来なくなり、死ぬしかなかった……。
だがＦａｔｅ（運命）はそれを許さなかった、その代わりに召喚されたのは……我侭な天人だった。

＊注意

この小説は独自解釈などがあります。

無双、最強系では無いのでその設定が嫌な人にはお勧めしません。

召喚と説明（前書き）

まさかのあの人がサーヴァントに！？
そんなお話始まります！！

召喚と説明

ある武家屋敷、そこにはその家の主である衛宮士郎しか居ない。

「ぐぁッ！！」

一人の青年、さっき話した衛宮士郎がそこには居た。
そして青い全身タイツ男が紅い槍を持って衛宮士郎の命を狙っていた。
理由は一つだけ、衛宮士郎には心当たりがあった。

先ほど、学校でこの全身タイツ男と戦っていた白と黒の双剣を持った赤い男と鎧を着た金髪の少女が戦っていたのだ、その人外の戦いを見ていたことに気付かれ、必死に校内まで逃げた。
だがこのタイツ男に追いつかれ槍で心臓を貫かれた。

その後、何故か知らないが校内で目を覚まし家に帰った。
服についた赤い血と傷口も消えていない状態でだ。

その後、今度こそ命を取る！と言わんばかり青タイツの男になぶられているのだ。

そして衛宮士郎はタイツ男に腹を蹴られ、一般人から見て物置、魔術師どころか半人前の衛宮士郎にとっては工房だ。

……正史であればここで衛宮士郎のサーヴァントになる少女、セイバーが現れるだろう。

……だが生命に反逆し記憶を持ったまま転生した存在に召喚されている……。

つまり彼には聖杯に参加することは出来ないのだ。

「ほぉ～、魔術師だったのか」

タイツ男は工房を見てそう言った。

「まぁいっか」

そう言ってタイツ男は紅い槍で衛宮士郎の命を奪おうとした。

――俺は……こんな所で死ぬのか？
――嫌だ！！死んで……死んでたまるか！！！

だが物語には奇跡が起こった、いや、世界が彼の死を望まなかったと言うべきか……
突如、床に魔法陣が現れ、そして地面が輝いた！

「おい……まさか……八対目か！！？」

光り輝いている魔法陣の上にエーテルで身体が構成される……それは次第に人の形になり、光が収まった瞬間タイツ男に蹴りをかました。

「ぐぁ！！！」

タイツ男は蹴りでぶっ飛び工房から追い出された。

「はぁ～」

士郎はその溜息をはいた主、さっき魔法陣から現れた存在を見た。
その格好は現代風の服に似ており、髪は青い長髪、黒い帽子に桃を

着けたあまりにもふざけたファッションだった。
士郎はその少女の姿をずっと見ていた、とても可愛らしく、そして美しい外見だ。
見惚れるのは当然だった。

「全くあの妖怪め……いくら退屈と言っても私を飛ばすなんて……嫌いだから？まぁ私も嫌いなんだけどね、アイツのこと」

少女は少しだけ早口で言った、そして士郎の方を向き……

「サーヴァント・エンゼル、とでも言って置くわ。貴方が私のマスターね、まぁ仮初だけどね～、でも私を楽しませてね、退屈は嫌いだから」
青髪の少女はそれを楽しそうに言った、まるで新しい玩具貰った子どものように無邪気だ。

「なるほどなぁ」

二人は声がした方を向いた、そこにはさっきぶっ飛ばされた青いタイツ男が居た。

「もう少し寝てなさいよ、永遠に寝ててもいいのだけれどね」

エンゼルがそう言うとタイツ男は鼻で笑った。

「ハンッ！そんな事する訳ねぇだろ、それにサーヴァント同士が会ったら如何するか分かってるだろう？」

「ええ、そうねランサー、なら」

「そんじゃまぁ……」

「「戦いましょうかッ！！」」

二人は互いにそう言い合うと、互いの獲物を取り出した。
タイツ男、ランサーはさっきまで使っていた紅い槍を、エンゼルはオレンジ色に光り輝く鍔の無い両刃の剣をそれぞれ持ち、ぶつかり合った。

甲高い金属音が響き渡る……ランサーの槍を剣で受け流すように反らす、そして槍を回避し接近、切りかかろうとした。
ランサーも負けじと突き出した槍を戻し、今度こそエンゼルを貫こうとし、突いた。
これはかわせないとランサーも確信し、そのままランサーの槍に貫かれた……

かに思えた。

ランサーの槍は先端が少しだけ刺さっているだけだ。
ランサーは力を入れるが貫ける気配が一向に無い……そして槍を引こうとしたが既にエンゼルの刃はランサーの頭を捕らえていた。

そしてそのまま切り裂かれた。

「……ッチ……避けられたわ」

「……今のは危なかったぜエンゼル」

ランサーは斬られる瞬間にマトリクス顔負けの避け方をし、頬を少しだけ深く切り裂かれた程度だった。
流石は最速サーヴァントであるランサーだ、他のサーヴァントなら今の攻撃でまず間違いなく死んでいたであろう。
ランサーは腕で頬に流れている血を拭う、その顔には確かな愉悦があった。

「エンゼルのクラスってのはそんなに硬ぇのか？」

「ええ、そうね。私から言わせれば鍛え方が足りないとでも言って置くわ」

「よく言うぜ」

ランサーはそう言いながらも槍に魔力を込めていた。

「じゃぁもう手加減はいらねぇな……その心臓、貰い受ける」

ランサーは走り出し、跳躍する。
エンゼルはそのままたっていた。

「ハァァァアアアアアアアッッッ！！！刺し穿つ死棘の槍（ゲイ・ボルク）！！

！」

ランサーによって投擲された紅い槍、ゲイ・ボルクは紅い閃光となり、エンゼルの心臓を狙う。
エンゼルは少し走ってかわそうとするがその槍は屈折し、そのまま心臓を貫いた。

それを見たランサーは顔を顰めていた。

「……ッチ！この程度か」

余りの呆気なさに
ランサーはエンゼルの近くに行き槍を抜こうとした。
だがランサーの顎にエンゼルの膝蹴りが炸裂した。

「ベフ！！？」

「……全く、服を汚してくれて……」

エンゼルはそれに怒りを覚える。

「ちょっと待て！！ゲイボルクで心臓貫かれたんじゃねぇか！！何で死んでねぇんだよ！！」

それも最もだ、普通は心臓に槍が刺さった時点で死ぬ……、だが普通じゃなければ……

「天人にとっての死は死神に五衰を与えられる事……それ以外で死ぬわけ無いでしょ、痛いけど」

そう、エンゼルのクラスにはA以上の固有スキルが与えられる、それは不老不死だ。
このエンゼルと言う名のクラスには不老不死のスキルがある、まともに戦っても普通に勝てる、言ってしまえば強すぎる為にめったに召喚されないのだ。
本当の意味でエンゼルのマスターにとっては一番いい存在でもあり、最悪な存在でもある。
不死殺しの伝説、又は宝具を持たないサーヴァントでは勝てない為、マスターを狙うしかないのだ。
その為マスターは常に全ての敵マスターに命を狙われないといけないのだ。

「まぁアンタにも簡単に分かるように言うわ」

「……俺ってそこまで馬鹿に見えるか？」

「少しだけ見えるわ、でもクランの種犬と言われたクー・フーリンには分からないでしょ、日本の宗教なんて」

今エンゼルはランサーの真名と同時にものすごい事を言ってしまった。

「まぁな……って誰が種犬だコラあああああ！！！」

「アンタの師匠のライバルの女を孕ませたじゃない」

「ち、ちが……「そこで動揺するんじゃないわよ、ぶっ飛びなさい」

ちょ、まっ」

ランサーが明らかに動揺していたのを良い事にエンゼルは手を翳す。

「かなめ石」

エンゼルがそう言うと大地から注連縄が付けられた巨大な石が出てきた、エンゼルはそれをランサーに投げつけようとした。

「……っち……わりぃがここまでだ……マスターからの命令が来た……」

「そう、なら帰りなさい、逃げる相手に興味は無いから」

エンゼルがそう言うとかなめ石を下に下げた。
どうやら飽きたようらしい……。

「すまねぇな、この決着は必ずつける！！」

そう言ってランサーは立ち去った、エンゼルも少しだけ次の戦いを楽しみにしていた。
そしてエンゼルは何かを思い出す。

「あ、すっかり忘れてた、マスター大丈夫？」

エンゼルはすっかり放心状態だった赤毛のマスター、衛宮士郎の方に向いた。

「……マスター、大丈夫だった？」

「あ、ああ……今のは……それよりも君は」

「ああ、ちょっと待って、今説明するから、どうせ何も理解していないマスターだって事は分かってるから」

エンゼルは士郎の方に歩き出した。

少女説明中

「で、どうするの？」

「……この町でそんな戦いが……止めないと……」

「まぁそれが一番いいでしょ、でもその為には他のサーヴァントを全て倒さないといけないわよ？」

「……戦うしかないのなら……」

「迷ってるならまだ決めなくていいわ」

「いや、俺は正義の味方として……何も関係ない人を危険に晒させない為に……この聖杯戦争を止めなくちゃいけない……」

士郎は必死に考えそれで答えを出した。

「まぁそれが正論ね、正義の味方ってのは少し可笑しいけれど……

……コレからよろしくね、マスター」

「ああ、エンゼル」

召喚と説明（後書き）

一応アンケート？取ります。
次の三つの中からラストはどんな風なのがいいか選んでください。

1. ハッピーエンド
2. トゥルーエンド
3. 両方！

一応この中から決めます、投票は今のところ無期限です。
投票お願いします！

ステータス・エンゼル（前書き）

短編の時の設定では強すぎたので改善します。
本編を楽しみにしている方はもう少しお待ちください。
風邪を引いていたので……

ステータス・エンゼル

【クラス】　エンゼル

【マスター】　衛宮士郎

【真名】　――――――

【性別】　女性

【属性】　混沌・善

【能力】

筋力C＋　魔力B

耐久A＋＋　幸運E－

敏捷C　宝具EX

【クラススキル】

不死：内臓などの損傷は再生できる、ただし肉体の一部が欠損した場合はその欠損した部分が無ければ再生できない。

上半身と下半身が分かれたり、首が千切れたりすると

流石に死ぬ。

【保有スキル】

単独行動：C
マスターからの魔力供給を断ってもしばらくは自律行動可能。ランクCならば、一日は現界可能。

戦闘続行：C
本来の場合は瀕死の重傷を負っても戦えること。

怪力：B＋
怪物的な意味合いの怪力ではなく天人としての怪力。
一時的になら筋力をA＋まで引き上げる。

戦闘開始

「ん、美味し」

サーヴァント・エンゼルはそのマスター、衛宮士郎のお菓子である饅頭を頬張っている。
士郎は台所で食事の準備をしている、誰の？エンゼルのに決まっている、なんで料理を作っている理由は……

「お腹空いたから何か作って」

その後「お菓子でもつまんで待ってるわ」と、言い士郎を台所に立たせた。
エンゼルは台所から匂ってくる、料理の匂いをかぎながら楽しみ待っていた。

だがエンゼルは表情を一瞬で変え、台所に行き士郎に話した。

「サーヴァントが来るわ、それも二体」

「何だって！！？」

士郎は驚いていたがエンゼルは冷静だった、彼女であるならば普通は喜んだりするのであるが……。

「流石に二体相手じゃかなりやばいわ、取り合えず逃げましょう」

そう言ってエンゼルはかなめ石を取り出し、目線で「乗れ」と言って来た。

士郎はそれに乗るとエンゼルもそれに飛び乗り空を飛んだ。

そしてそれと同時に一本の矢が飛んできた。

「……どうしよう乱麻」

黒髪のツインテールで赤い服を着た少女、遠坂凛が一人の男に話しかけていた。
男は銀髪で赤と蒼のオッドアイ、「本当にこんな人がいるんだなぁ」と、思わせてくれるような人間であるならばまず間違いなく絶対にありえない容姿をしていた。

そう、コイツこそが諸悪の根源である、一神乱麻だ……下手に名前まで中2が考えるような名前だったら最早救いようが無かった、既に救いようが無いけど……。

「そうだな……本来なら記憶を消したいところなんだが……もう遅いかも知れない、既にランサーの餌食に……」

乱麻は困ったように言っているがコレは建前である、本心はこっちである。

「（今ここでアイツを救えばどうせ正義の味方だからほっとけないとかで乱すんだ、そもそもあいつ自身が居なくなれば俺が主人公になるんだ、アーチャーもあいつのせいで苦しんでるんだ、死んだ方が良いに決まってる。セイバーも俺が召喚したし、もしもイレギュラーでサーヴァントを召喚しても俺のセイバーの方が強いに決まっている）」

明らかに士郎に対して強い殺意と嫌悪感を抱いている。
自分は特別な人間だ、とでも思っているのか？

「（大体なんで神は俺に無限の剣製をくれなかったんだ！？士郎なんて魔術を使えない落ちこぼれでいいんだよ！！）」

乱麻は神に対して怒っている、だが彼には無限の剣製は扱えない、

別の世界ならともかくここはその本来の担い手が居る世界。
固有結界は一つ一つ違うのには理由がある、固有結界は発動した魔術師の心象風景なのだ。
無限の剣製は衛宮士郎でなければ体得できないのだ。

「（だがあの偽善者は本来の魔術を使えない、そしてそれを知る者は居ない！！体得する前に殺しちまえば！！）」

だが彼の予想は外れることになる、士郎が召喚したエンゼルが気付いて……。

「マスター！今からなら間に合います！！」

青いドレス服の上に鎧を着た少女、セイバーが乱麻にそう言った。

「そうかもな、よし！行くか！！」

「（死体の確認でもしてやるか）」

そして衛宮家の近くに来て……

「マスター、あの小僧と一緒に居るサーヴァントが居る」

赤い服を着たサーヴァント、アーチャーが喋った。

「それはランサー？」

「いや、あの小僧の手に令呪がある、つまりあの小僧は……」

アーチャー自身も少し驚いていたが次の言葉を口に出して言う。

「マスターだ」

「マジ？」

「ああ」

この時のアーチャーの心情は「全く信じられなかった」だった。。

アーチャーにとってこの世界は全く違った世界だった。

このままでは衛宮士郎殺しも出来ない、しても意味は無いと思っていた。

彼の最愛の人であるセイバーは知らない男に召喚され、凛はありえないほどベタボレだ。

唯一の救いはセイバーがまだ完全にこの男に気を許していないと言う事だった。

この男は常に魅了（チャーム）の魔術を使っている、正確にはそれに近い何かだ

ったが……。
その為彼女も完全に心を許す事は無く、常に一線を引いている状態なのだが。

だが何かの偶然か衛宮士郎はサーヴァントを召喚していた、青い長髪の桃帽子の少女だ。
少なくとも見たこと無い少女だった、そしてとても人間離れしていた。

「（何だあのサーヴァントは……？）」

少なくとも英霊ではない、恐らく亡霊でもない、生前の肉体をエーテル体に変え、サーヴァントと対等に戦えるようにしたような感じだ。

それがランサーと同等に戦えるようになった本当の理由だ、エンゼルももし生きて帰れる事が出来、その後英雄になるような行いをすれば英霊にいたる事は出来る。

「（あんな存在は見たこと無い！！）」

そう、アーチャーにとっては全く分からない存在だった。
まだ不確定要素がありすぎるため……攻撃はまだしないようにしたかった。

「アーチャー！！狙え！！」

だが一神乱麻はアーチャーに命令をした。

「な！！マスター貴方！！」

「ちょっと待ちなさい！！」

二人の少女はそれを止めようとする……。

だがアーチャーには止める理由が無い――！！

「……了解した」

そう言ってアーチャーは黒い弓を取り出して……

――――衛宮士郎を狙って放った。

その矢はしっかりと士郎に喰らい着くように吸い込まれていくように進む。

だがその矢はかなめ石に当たり外れた、否、先に士郎が避けたのだ。

正確にはエンゼルがそうさせたのだが……。

エンゼルはそのまま浮上し、橙色に光る剣を振るう。

その刀身から橙色の斬撃が掃射され、アーチャー達に向かってきた。

その斬撃は七つに別れ、そのまま四人を襲う……。

――――第二話・戦闘開始

逃亡（前書き）

皆大好きあの外道が登場！

逃亡

―――エンゼルの剣から放たれた七つの斬撃が４人を襲う・・・・・・・・・。

だがセイバーは見えない剣でそれをなぎ払い、アーチャーは白と黒の双剣を出し防ぐ。

乱麻は日本刀型の魔術礼装を取り出し切り裂く・・・・・・・・・・事は無く逆に圧されて日本刀が僅かだが曲がった。

だがそれでも弾く程度の事は出来たため結果的には防いだ。

「くそったれ！！」

乱麻はそう吐き捨てると、ギョッとした。

その理由は衛宮士郎のサーヴァントにあった。

青い髪に二つの桃が付いた帽子、それは乱麻の前世で見たある作品のキャラクターだからだ。

「（おいおい、マジかよ・・・・・・何で東方のキャラが居るんだよっ！！？）」

乱麻は少しだけ動揺したがそれも一瞬だけで、心の中で笑った。

「（はっ、東方のキャラが居るんなら幻想郷に行ってフラグを立てるのも悪くないな）」

たとえ違っていてもアレほどの美少女だ、惚れさせてハーレムに入れるのも悪くないな。

心の中でそう思っていた。

そして心の中で笑っていたが、それがいつの間にか顔に出ていた。
それを見た凛はアーチャーに頼んで少し離れるよう頼んだ。
アーチャーはそれに従い凛を抱き抱え、数歩分後ろに下がった。

セイバーは顔を見ないようにするため乱麻の前にでた。

「（・・・・・・・・今回のマスターも外れですね・・・）」

セイバーは心の中でそう思っていた。

「（ですが・・・・・・・・祖国ブリテンの為に・・・・・・必ず聖杯をっ！！）」

そしてそれ以上に聖杯を望んでいた、それは自分のマスターを殺してでもと・・・・・・・。

「・・・・・・・・・まずいわね」

エンゼルはかなめ石に乗ったままそう呟いた、上昇を続けながら・・・・・・・・・。

「何がまずいんだ、エンゼル！」

士郎はかなめ石を必死で掴みながらエンゼルに聞いた。

「サーヴァントが二体、もちろんマスター込みでね・・・・・・・・・後絶対に力抜いちゃ駄目よ、落ちるから」

エンゼルは冷静にそう答えた、後半は半ば脅しだったが士郎はエンゼルの言う通りにかなめ石をを掴む力を強くした。

「・・・・・・マスター、質問よ」

エンゼルは唐突に質問した。

「このまま戦う？それとも逃げる？」

二択だった。

「・・・・・・戦うを選んだ場合はどうなるんだ？」

士郎は聞いた、質問の意味を・・・・・・・・・。

「戦うなら敵マスターを殺すわ、流石にサーヴァント二体相手に勝つ自信はないからね、だけど地面に足をつける生き物相手なら絶対に負けない自信があるもの」

それが一番簡単に、相手に勝つ方法だ。
いくら強力なサーヴァントでもマスターを殺せば良い、そしてサーヴァントが新しいマスターと契約する前に殺せば良い。

それがこの聖杯戦争で楽に勝ち抜く為の方法だ。

「そんなのは駄目だ！マスターとはいえ・・・・・人を殺すなんて間違ってるっ！！」

だが士郎はそれをしなかった。
正義の味方を目指している彼には自分の命を狙う敵とは言え、人を殺したくは無いのだ。

「分かったわ・・・・・・・・なら逃げるに決定ね！」

エンゼルはそう言うと、上昇を止め、逃げ出した。
だがアーチャーの矢はしつこく、エンゼルを……正確には士郎を狙う。
エンゼルも負けるわけにはいかなく、高速で避け続ける。

「……中々当たらんな」

アーチャーは苛立っていた。
アーチャーのクラスは遠くにいる相手を倒すのには打って付けだろう……そういう意味では最強だ。
だがそれはあくまで相手が地面に足がついてる場合、もしくは相手が宙に浮いており体制を変えられない場合だ。
だがエンゼルはそのまま飛行し続けている、それに常に障壁を張っているのだ。
アーチャーの矢はとどくと同時にその威力を減らされずらされる。

「……ならば……」

アーチャーは一本の剣を投影する……その剣は捻じ曲がっており斬る事より貫くことしかできないと言った印象だ。

「―Ｉ　ａｍ　ｔｈａ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｏｗｒｄ《体は剣で出来ている》……」

その剣を矢に見立てて弓を構える、剣の形は変わり矢に変わる。

「アーチャー！！止めなさい！！！」

凛がアーチャーに命令する、だが既に手遅れ！！

「偽・螺旋剣（カラドボルグ）――――――――――！！！」

「……ヤバイわね……」

エンゼルは冷静に観察する、その先にはアーチャーが居た。
アーチャーは膨大な魔力を使っている、エンゼルは宝具を使うのだと判断した。

「士郎、私にしがみつきなさい……」

「なっ！！！？ちょっと待て！！女の子にそんな事」

「良いから早く！！！」

エンゼルの覇気に押され士郎はエンゼルの腰にしがみ付く。

「……気質、魔力を集めて……放つ、あいつが放つより一秒前に」

エンゼルは剣を自身の後ろに向け、魔力を集めた。

集めて集めて収束し、爆発寸前まで溜め込む……。

そして、時が止まったかのように空中で制止する。

一秒……まだ早い。

二秒……士郎が緊張と吐き気で体調を崩しかけている。

三秒……、そこでエンゼルは集めた魔力を全て放出した！

アーチャーが放った矢はその瞬間放たれた！

僅かではあるがエンゼルの方が少しだけ早く動いた、一瞬とは言えその差はアーチャーが放った弓をかわせると言う事実だ、エンゼルが放った魔力は逃亡にだけしか使わず、その一瞬の間ですれすれではあるがかわせた。

アーチャーが放った矢はエンゼルの魔力のレーザーに飲み込まれた、その時点でアーチャーが放った時の威力は完全に消滅した。

だがその矢に残っている魔力は違った。

その矢は硬イ稲妻（カラドボルグ）の投影品（贋作）が形を変え剣から矢に変わった

物だ。
言ってしまえば宝具だ、つまり……

「壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）」

壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）、それは聖杯戦争で一回しか使えない最後の手段だ。
宝具の数によってそれが出来る回数も違うし、威力もランクによって変わる。
だが、マトモにくらえばサーヴァントと言えど良くて重症、悪ければ確実に死ぬ一撃だ。

だがこの弓兵はそれを意図も簡単に使って見せた。
つまり何度も使えると言う事だ。

――――煙が晴れる間も無く、一筋のレーザーが放出された。

その勢いは煙を生み出した気流で吹き飛ばし、そのまま消えうせた。

つまり、エンゼルたちは逃げる事に成功したのだ！！

「……逃げられたか」

アーチャーは静かに、しかし忌々しげに呟いていた。

「……今からでも遅くない！！追って殺ッ！！」

ドスッ！

乱麻がしつこく士郎を殺そうと言うがセイバーに腹を殴られてその

まま気を失った。

「……暫く寝てなさい」

セイバーは乱麻をゴミ虫を見るような目で見ていた。
最早マスターとして認められていなかったのだ。

「……ねぇセイバー、乱麻とじゃなく私と組まない？それなら――――」

「それも良いかも知れませんね」

乱麻とセイバーの関係は既に崩壊していた。

「……（できれば私は士郎に呼ばれたかった……）」

「……逃げ切れた……」

「……ああ、そうだ……ウプ」

エンゼルは逃げ切れた事に安堵しており、士郎はあの速さで飛行した為吐き気を感じていた。

今いる場所は教会がある所だった。

「……取り合えず今は」

「よく来たな、八体目のサーヴァントに八人目のマスター」

エンゼルと士郎の後ろから響く声、それは不気味ば声だった。

「私は此度の聖杯戦争の監査役、言峰綺礼だ」

教会（前書き）

スーパー外道タイムスタートです。

すみません、言ってみたかっただけです。

ともかく外道な神父事言峰綺礼がメインな話始まり始まり～。

教会

言峰教会……。
冬木市にあるたった一つの教会、そこに二人の男と、一人の少女が居た。
赤毛の少年に神父服を着て薄く笑う神父、青い髪をした明らかに常人離れした少女。
その教会で会話が行われていた。

「では改めて……ようこそ、言峰教会へ。この教会の管理を任されている言峰綺礼という。君は聖杯戦争の八人目――、最後でイレギュラーなマスターとそのサーヴァントで間違いないか？」

教会に響く重厚な声。
俺は何故かは分からないがそれが不快だった、まるでこの男の腹の中に居るような感じだ……。
そして見透かされている気もする。

「――――ああ、間違いない」

エンゼルはこの男、言峰綺礼を見ようとすらしない。
単純に教会が珍しいのか、興味が無いのか、もしくは言峰綺礼を気味悪く思っているのか……恐らく全てだろう。

そう思っていたらエンゼルが唐突に言峰綺礼を見る。

「何で私たちがサーヴァントとマスターだと分かったの？」

それが一番の疑問だった、確かに空からやってきたが言峰綺礼は何故来るのを知っていたのか……。

「それは簡単な事だ、少年の手にマスターの証である令呪があるのでな。それでマスターだと分かっただけに過ぎない」

言峰綺礼は薄ら笑いをし、そう言いのけた。

だがエンゼルは明らかに言峰綺礼を疑っていた、エンゼルがこの男を疑うように俺もこの男を、言峰綺礼を信用できない……。

「――だが可笑しな事もあるものだな、まさか八人目のマスターにも令呪がちゃんとあるのだから」

「……何が言いたいんだ」

「いやなに、ただの独り言だ。それで君の名前は何と言うのだ？」

話を逸らしていたが単純な疑問らしかった。

そんなに令呪がある事がおかしかったのか？

「――衛宮士郎」

俺が名前を言うと言峰綺礼は僅かにだが口元を歪ませ、笑い始めた。

「――衛宮…。そうか衛宮士郎か…。ククク、成る程な」

言峰綺礼は愉悦を隠そうとしないで笑っている。
自嘲でもなく嘲笑するものでもない、単純に歓喜していたのだ。

「何が可笑しい！！」

俺が怒鳴ると言峰が笑いを止める。
いや、口元は笑っていた……。
そして言峰は少し溜めると……、

「喜べ、衛宮士郎。この聖杯戦争を勝ち残り聖杯を手に入れれば、お前の内に溜まった泥を全て吐き出すことも可能だ」

……奴は何を言っている？
『内に溜まった泥』だと？　何の事だ……？
不思議に思うと同時に恐怖する、言峰は俺の事を知っており、そして見透かされていることに……。
いや、見透かしてはいないだろうがそう錯覚する……。

「……何を言っている」

俺のその言葉を待ち構えていたかのように言峰綺礼は自身の嗜好をさらけ出し始めた。

「前に聖杯戦争が起きたのは十年前、その最後に起きた聖杯戦争の爪痕は君もよく知るところじゃないかね――――？」

「なっ――――！！？」

十年前だって――――！！？

まさか…………

「その様子では分かったようだな、その通りだ。未だ原因不明とされている十年前の災禍こそ、前回の聖杯戦争によるものだ」

十年前の冬木で起きた未曾有の大火災。それこそこの俺、衛宮士郎にとって最大級の精神的外傷だ。

あの地獄の光景は今も網膜に焼き付きついている。

——視界にあるのは赤

——空は赤く染まり業火に包まれ倒壊する家屋…………。

——呼吸するだけで肺が焼きつきそうになり、鼻腔を刺激するのは充満する死の匂いと…………

————人の焼ける匂いッ！！！

「ぁ——」

フラッシュバックする生々しい記憶……。

人が助けを求めてる、親がこの子だけでも、と子供を差し出してきたのを無視する。

何も考えないようにしていた、それでも死ぬのが怖かった。

助けて助けてと何度も呟く人たちを無視し歩き続けた。
――ごめんなさい、ごめんなさいと言いながら。
……。

「――――大丈夫？」

エンゼルが言った言葉で現実に引き戻される。
耳の奥では未だに燃えだかる業火の音と体を焼かれ悲鳴を上げる人たちの叫びが聞こえていた。
額からでた汗を今着ているトレーナーで拭う。

「……大丈夫だ、問題ない……」

「じゃぁ無いわね、どう見ても」

エンゼルが心配そうに俺の顔を見上げていた。
普段ならばエンゼルのように可愛い女の子に見上げられてたら照れるが今はそんな気分じゃない。

「ククククッ。……大丈夫かね？衛宮士郎」

今のを見ていれば分かるはずだが言峰綺礼はワザと言う。
言峰の顔は笑っている、俺の顔を見て心底オモシロそうに笑う。
こいつは人として歪んでいる。
そして、次の標的に言峰はエンゼルを見た。

エンゼルは少し後ずさり、言峰の濁った目を見た。

「……な、何よ」

「それはそうとおもしろいサーヴァントを引き当てたものだ、今回で五度目を数える聖杯戦争において最大のイレギュラーを引いたと言っても過言ではなかろう」

本当に言峰がエンゼルを見て不快そうだがそう言った。
言峰は何故かエンゼルを不快そうな目で見る。

「此度の聖杯戦争のクラスは既に全て現れている、彼女が何のクラスに該当するのか聖杯戦争の監督者である私ですら分かりかねる」

「なんだそんな事か」

エンゼルは心底どうでもいいような顔をしていた。
言峰の態度が気に入らないのか、憮然とした様子で適当に受け流す。

もしかしたらだが、この少女は聖杯自体に大した興味がないのだろうか。

「まぁ良いわ、私のクラスはエンゼルよ」

「……成る程、天使(エンゼル)か」

言峰が急に頭を下げる。

「それは失礼したな」

「いいわ、頭なんて下げなくても。貴方信仰してないようだし」

「そうか、ならば普通でいる事にしよう」

確かに教会では天使は神の使いだからな、言峰が頭を下げた理由は分かった。

だが神父が信仰してなくて良いのか？

「ならば、この聖杯戦争のルールを教えよう」

その後、俺とエンゼルは聖杯戦争について監督者たる言峰綺礼から詳しく教えてもらうことになった。

エンゼルからも大まかに聖杯戦争のシステムを教えてもらったが、その補足と疑問も兼ねてのものだ。

俺としては一刻も早くこの場から立ち去りたかったが、どうもそれを許さない雰囲気だった。

――そして長い話は終わり……。

「では、ここに聖杯戦争の開幕をここに宣言する――。衛宮士郎、思う存分戦うがよい。聖杯は願望機だ、どんな望みも叶えられる。そう、すべてをはじめからやり直すことも可能だ」

言峰が何を言いたいか理解した。
だけど、俺にそんなつもりは毛頭もない。アレを無かったことになんか決してできない。
確かにやり直したくないと言えば嘘になる、でもアレを忘れることだけは出来ない。
俺とエンゼルは言峰に背を向けて、無言で教会の外へと向かう。

「聖杯戦争は始まった。いついかなる時も、気を配らせることだな――」

俺たちは言峰に振り向かず、そのまま教会を出て行った。

教会で当てられた空気を全て入れ換えるように何度か深呼吸する。
時計を見ると、日付も変わってからかなりの時間が過ぎていた。
そしてそのまま冬木大橋を超えて深町の住宅街を歩いていると、エンゼルが急に立ち止まった。

「どうしたんだ？」

「……士郎、アンタって運無いでしょ」

エンゼルにそんな事を急に言われた。
確かに今日、日付が変わったから昨日は運が無かった。
だが今日も運が無いわけでは……

「……走るわよ」

エンゼルが俺の手を掴むと走り出した。
そして気付いた、俺たちを追ってきてる奴が居ることに……。
そして人気が無いところに来て……

「……逃げるのは無理そうね……」

エンゼルが半ば諦め、そして後ろを見た。
後ろには鉛色の巨体とアルビノの少女が居た。

「――こんばんは、お兄ちゃん。こうして会うのは二度目だね」

少女がそう言うとエンゼルは身構える……。

「あ、そういえば自己紹介がまだだったね。私の名前はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。聖杯戦争のマスターよ」

なんだって……？
こんな小さい少女が……マスター？

「そしてこれが私のサーヴァント、バーサーカー」

白い少女が後ろに居る鉛色の巨人を見た。
その巨人から感じるのは圧倒的な力だ。

「知り合い？」

「……いや、数日前にすれ違っただけだ」

エンゼルが俺に聞く、だが俺自身彼女を、イリヤを知らない。

「アハハ、ずっと待ってたんだよ、教会から出るのをね」

イリヤは笑いながらそう言う。
そして口角を吊り上げ、酷薄な笑みを作る。

「やっちゃえ、狂戦士（バーサーカー）」

狂戦士と永遠幼女（前書き）

非常に難産でした……。
そして少しギャグを入れてみました

バーサーカーが振り下ろした岩で出来た無骨な斧剣をエンゼルと俺目掛けて振り下ろした。
エンゼルはその攻撃を士郎を抱えかわした、だが右肩から血が飛び散った。

「離れてもあのパワーだなんて」

エンゼルは苛立つ様に言う。

「凄いでしょ、私のバーサーカー」

イリヤはそれを誇らしげに言う、何であんな小さい子が……。

「教えてあげるよお兄ちゃん、私のバーサーカーの真名はね……ヘラクレスなんだよ」

「ヘラクレス……？」

「そう、ギリシャ神話に出てくる大英雄」

「……厄介な」

エンゼルがそう言うのも無理は無い、あれは本当に危険だ……。
ヘラクレスの名前くらいは知っている、聖杯戦争では知名度も重要なものになるのだから……。

「なんでだ、イリヤ……なんで」

何でイリヤがこんな戦いをしなくちゃいけないんだ……。
いくらヘラクレスほどの大英雄がいたとしてもイリヤが死んでしまうかもしれないのに……。

「教えてくれイリヤ！なんで俺を」

「それはね、お兄ちゃんが切嗣の息子だからだよ」

イリヤが淡々と答えた……。

「昔ね、私の家『アインツベルン』に雇われていたからよ。十年前に起きた聖杯戦争で聖杯を手に入れる為にね」

「なっ……」

そんな事は聞いた事が無かった、親父が前回の聖杯戦争に参加していただなんて……。

「そこで切嗣は私のお母様と子を成したわ、それが私」

「……じゃぁ俺とイリヤは兄妹になるのか？」

「そうね、まぁそうなるわね」

「ならなんで士郎を狙うの？」

エンゼルも会話に入ってきた、そして俺は何時の間にかかなめ石に乗って空を飛んでいた。

何時の間に……。

「切嗣はね、前回の聖杯戦争で勝ち残り聖杯を手に入れる寸前まで行ったわ……でもね、切嗣は聖杯まで後一歩って言うところに来て自分のサーヴァントを使って聖杯を破壊させたのよ」

親父が聖杯を破壊した？

「それで大爺様はかんかんでね、でもまぁ私は……」

イリヤは目を閉じ……

「士郎を殺したいだけなんだけどね」

笑顔でそう言った。

「まぁ士郎が私の人形（サーヴァント）になってくれたら見逃してあげてもいいけどね」

「……ククク」

そう言うイリヤを見て笑うエンゼル。

「……何？」

「いいえ、何も」

明らかにエンゼルは笑っていた、あざ笑っていた。

「いいから言いなさい、そうやってもったいぶられるのは嫌だから」

「なら、言いますわ」

エンゼルは少し溜めると………

「貴方のような永遠幼女（エターナルロリータ）にそんな台詞が似合うと思っていたの？バカじゃないの？」

………はっ？

「………狂いなさい、バーサーカー」

「■■■ッッッ！！！！」

バーサーカーは咆哮を上げ俺達に襲い掛かってきた。

って

「何言ってんだよ！！エンゼル！！」
「何ってあの暴言？」
「そうだよ！！」
「本当の事じゃない」
「だから何で言うのさ！！！」
「決まってるじゃない、面白いからよ！！！」
「なんでさぁ～！！！」
俺は改めてこのサーヴァントの本質を知った。
そしてそれと同時にイリヤが……。
「大丈夫だよお兄ちゃんは死なないから」
笑顔で言っていた、だが目だけは笑っていなかった。
「取り合えず四肢は無くなるけど」
「なんでさ！！？」
殺される！！俺殺される！！
殺されはしないけど確実に四肢が無くなる！！
「良かったわね、生きれるわよ」

「そんなんじゃ死んだ方がマシだぞ！！」

爺さん、俺…………ここで死ぬかもしれない。

「じゃぁ殺りなさい、バーサーカー」

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ッッッ！！！！」

ギャァァァァアア！！！！引き裂かれる！！四肢を引き裂かれる！！

「ッ！！！？」

あれ？バーサーカーの右足が地面に埋まった？

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ーーーーーーーーーーー・・・・・・・・・・・」

見る見るうちに地面が割れその間にバーサーカーが落ちていった。バーサーカーの声がどんどん遠くなっていくからかなり深いんだろうか………。

「バーサーカー！！？」

イリヤが悲痛に叫ぶ、そしてどんどん割れた地面が戻っていく……。こんな事は絶対にありえない、一体誰が……

「ふぅ、まさかあそこまで上手くいくとは思わなかったわ」

コイツが犯人だった。

「さてと、じゃぁ永遠幼女（エターナルロリータ）。アンタが一番最初の脱落者よ」

「永遠幼女（エターナルロリータ）じゃないもん！！これでも１８歳だもん！！」

「永遠幼女（エターナルロリータ）じゃない、まぁここで死ぬあんたには終った話になるんでしょうけどね」

そう言ってエンゼルは剣を振り上げる……。

「待ってくれ！！エンゼル！！」

「何で待たないといけないのよ」

エンゼルは少しあせったように言った。

「ふん、お兄ちゃんは失敗したね」

イリヤがあざ笑いながらそう言う。

「今ここで私を殺しておけば……」

地面が揺れる、エンゼルは跳躍し俺が乗っているか石に立つ。

すると地面から巨大な鉛色の腕が生えた。

「っち……」

「さぁて、お兄ちゃん達！今日は逃がさないからね！！」

暗殺者（前書き）

もう少し長く書きたいんですが……
取り合えずもう少し先に進めば……

暗殺者

エンゼルはバーサーカーの振り下ろした無骨な斧剣を乗っているかなめ石で回避する。
だがかなめ石も全ての攻撃をかわしきれずに傷ついていた。

「フフフ、よく逃げるわね」

「こっちは相手の攻撃をかわすのだけは慣れているからね」

――もっとも、それも長く続くはずが無い。

相手の攻撃をかわすのが上手くても絶対に勝てない。
エンゼルも攻撃はしている、だがその攻撃が全くと言ってもいいほどバーサーカーの体は硬かった。

「硬すぎよ、一体何を食べたらこうなるのよ」

「これがバーサーカーの宝具、十二の試練（ゴッド・ハンド）よ」

「へぇ、随分教えてくれるわね」

「貴女じゃ私のバーサーカーには勝てないもの、それにバーサーカーを傷つけるにはAランク以上の宝具が必要だしそれに十一回殺してその後に一回、合計十二回殺さないといけないのよ」

イリヤはエンゼルを見下す。
だがエンゼルは不適に笑う……。
「そう、やってみる？」
そう言ってかなめ石から飛び降りる……
「エンゼル！！」
「士郎は黙ってみていなさい、役立たずなんだから」
役立たず、その一言が士郎の心の中に突き刺さる。
「今は弱いんだからじっと見ていなさい、それに１２回程度なら殺しきる自信が」
エンゼルは士郎を笑顔で見て……
「あるから」
そう言って剣を構える。
その剣からは橙色の莫大とも言える魔力が溢れ出ていた。
「……へぇ、言うだけはあるわね……でもバーサーカーがその剣を態々受けると思う？」
「だったら動けなくすればいいだけですわ」
エンゼルが言った直後に大地が揺れる、そして地面から土でできた触手のような物がバーサーカーに絡みついた。

「そんなものでバーサーカーの動きが止められるとでも？」

「ええ、思ってないわ。でも足止めには十分でしょ」

どんどんバーサーカーに絡みつく、それをバーサーカーが壊そうとするが中々壊れなかった。

「じゃぁまずは足から切り落とすわ」

エンゼルが剣を振るう

バーサーカーの両足がずれ落ちそこから血が噴出した。

「次は両腕を」

二回剣を振るう、バーサーカーの両腕が切り落とされる。

「これでサンドバックね」

そこからはエンゼルの猛攻だった。

エンゼルの剣がバーサーカーの左胸から右脇腹まで一閃、心臓に一刺し、横に一閃、首を切り落とし縦に真っ二つ、脳を貫きそのまま真っ二つにした。

「これをしてもまだ死なないのね」

エンゼルはそう言って一旦後ろに下がる。

「ええ、でも凄いわねエンゼル。まさかバーサーカーを5回も殺す

なんて」

「もうこれ以上私の腕で殺すのは無理よ」

エンゼルは腕を摩りながらそう言う。

バーサーカーも少しずつ再生し、元の姿に戻っていた。

「へぇ、じゃぁ諦めるの？」

「まさか、宝具を使わせてもらうわ」

「真名開放ね、クスクスクス」

エンゼルがそう言うとイリヤは笑い出す。

「その宝具の特性は分かったわ、魂喰いを利用してるようなものね。他から必要な物を持ってくる宝具……まさに凶悪だけど私のバーサーカーにはいくら集めたって効かないわ。それこそ世界中から集めるのなら別だけどそんなの無理よ」

またイリヤが笑い出す。

だがエンゼルも不適に笑う。

「一つ言っておくけどね、これが魂喰いの応用の前提で話してんじゃないわよ」

エンゼルはそう言うと剣から手を離す、剣は空中に静止し回転を始める。

「あってたんじゃないの？」

「ええ、全部正解よ」

「ならエンゼルに勝ち目はッ！！！？嘘でしょ！！？」

イリヤの言った言葉は全てあっていた、そう、全てだ。
つまり世界中から集めるのだ、それは半永久的に魔力を得られる事に等しい。

「バーサーカー！！！急いで殺しなさい！！早く！！」

イリヤがそれに気付きバーサーカーに命ずる。
だがバーサーカーが急に倒れる。

「な、何で」

「簡単よ、そいつの魔力を思いっきり吸い上げればいいだけだからね」

最早打つ手は無し、いくらイリヤがバーサーカーのマスター、魔術師として優れていても魔力その物を奪い取られれば勝ち目などあるはずが無い。
橙色に光る魔力が収束し……

「時間がかかるけど……でもこれで終わりね」

エンゼルはその時勝利を確信した……。

「危ない！！エンゼル！！」

だが士郎が前に出てきてエンゼルを押し倒した、そのせいで収束し溜めていた魔力が四散した。

「ちょ、一体何を」

「あぐぁ！！」

士郎の左腕がいきなり何かに切り裂かれた、傷は深くは無いが浅くも無い。

「……っく！！」

エンゼルはすぐに立ち上がり士郎を守るようにしながら地面から触手を出し、攻撃した。
その攻撃をかわすなにか……。

「まさかアサシン！？バーサーカー！！」

「■■■■■■■■ッッッ！！」

バーサーカーがアサシンを殺そうと斧剣を振り回すがアサシンは既に居ない……

「士郎は私の後ろに隠れて……って士郎！！」

エンゼルはそう言いながらも士郎はイリヤの所に向かっていた。

「危ない！！イリヤ！！」

「え？」

ドスッ！！！

同盟（前書き）

今回も短いです、あと少しで……書きたかった話を……

―――ブシャッ！！！

飛び散るのは真赤な血、それの出所はイリヤスフィールを庇い、アサシンの投げたナイフを背中に喰らったサーヴァントエンゼルのマスター、衛宮士郎の血だ。

「ガハッ！！！」

士郎は口から喀血する、その血液はイリヤスフィールの顔に付着する。

「……大…丈夫……か？……イ……リ」

士郎の表情は儚げな笑顔をイリヤスフィールに向けそのまま倒れた。

「士郎！！」

エンゼルが慌てて駆け寄る、士郎の背中に刺さっているナイフを抜き周りから魔力を集めて士郎に与える。
だがそれでも傷口が少しずつ塞がりつつあるがそれでも血は止まらなかった。

「こういうのは苦手なんだけど……」

エンゼルは皮肉そうに言う、だが士郎の方が異常なのだ。
エンゼルの治療は高い魔力に反して治りにくい、だが士郎の方は何もしなくても傷が少しずつなくなるのだ。
そしてイリヤは士郎を見ながらこう言う。
「な……なんで……」
――なんで笑っていたの？
イリヤの頭の中にはそれしかなかった、何で自分を助けたの？それが出るはずなのにだ。
イリヤはその顔に見覚えが合った。
それは幼い頃、まだ衛宮切嗣と一緒に居た時……少しだけ見た切嗣の顔と同じだった。
「……ヤバイわね」
エンゼルは士郎を守りながら治療を続けている、だが一向に治る気配が無い。
「……士郎？」
イリヤは静かに士郎を見つめる、血が地面に流れていく――――。
命の雫が流出していく。
「……どいて、エンゼル」

「何をッ！……貴方……」

「大丈夫、殺さないから……」

そう言ってイリヤは士郎の傷口に手を乗せ魔力を注ぐ、するとどんどん士郎の傷が治っていく。

「まだ、死なせないから……」

「……士郎の傷は貴方に任せるわ」

エンゼルはイリヤに背を向け剣を構える、剣には魔力が集まり……

……そして

「はっ！！」

――一閃。

斬撃は飛礫となりそのまま回りを薙ぎ払う、木、地面に穴を開けそして一個だけアサシンに当たる。

「ぐぅ！？」

「■■■■■■■■■■■■■■■■ッッッ！！！

アサシンは左腕を損傷し、バーサーカーがアサシンの命を奪おうと追撃をかける。

だがアサシンはそれを何とかかわす、だが完全にかわしきれなかったのか左腕が切り裂かれていた。

「ぐぅおおおぉぉぉ！！」

アサシンは右腕で切り落とされた左腕を掴み逃げ去る、バーサーカーがそれを追おうとするが既にアサシンは気配を絶っており何処に居るのか分からなくなった。

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■！！！！！」

「逃げられたわね……」

バーサーカーが吠え、エンゼルが苦々しげにそう言う。

「でも良かったと思うべきよ」

そしてイリヤがエンゼルに対して言う。

「永遠幼女（エターナルロリータ）」

「誰が永遠幼女（エターナルロリータ）よ、まぁ良いわ……サーヴァント達が戦っている時にアサシンがマスターを狙うのは流石にやばかったわね。まさかサーヴァントがマスターを助けられない時に来るなんて……、でもまぁエンゼルが宝具をキャンセルして守ったんだから」

「何が言いたいの？」

イリヤはそう言うとエンゼルが聞く。

「……ここは？」

士郎は目を覚ました、天井は見覚えのある形をしていた。

「夢……だったのか？」

と口で言いつつもそれを否定する。

「いや、あんなリアルな夢は……」

「お兄ちゃーん！！！」

士郎は声がした方を向いた、そこにはジャンプしてこちらに飛び込むバーサーカーのマスターであるイリヤスフィール・フォン・アインツベルンが居た。

イリヤは浮いている、そのままでは重力と勢いにしたがって士郎の胸に当たる。

「ちょっ、まっ！！」

だがそんな士郎の叫びも虚しいものになり、イリヤはそのまま士郎の胸に飛び込んだ。

「ぐふっ！！？」

――――士郎は昨日も含めれば合計四回死に掛けた。

「で、何でイリヤがここに居るんだ？」

士郎はなんとか三途の川から奇跡的に戻って来る事が出来た為朝食を食べているエンゼルに聞く。

「私達、同盟を組んだのよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3574y/

Fate×東方　あたしを誰だと想ってるの！？

2012年1月2日11時49分発行